

公表：令和5年3月23日

事業所名：江戸川区篠崎児童発達支援センター

職員による自己評価

A環境面

- ・職員配置については職員の体感として、少ない、多い、クラスの状況によって調整が必要。
- ・管理者は療育と管理業務の両方を行っているが管理業務に専念した方が良い。
- ・生活空間の構造については、おむつ替え台を増やすなどの環境調整や肢体不自由児へ支援をより手厚くする必要があると感じる。
- ・衛生面については特に問題なし。

B業務改善

- ・第三者による外部評価や事業者向け自己評価、保護者向け自己評価を行い、業務改善に今後つなげていく。
- ・研修は行われており、もっと受けたいとの意見が見られた。また職員によって研修参加機会に偏りがある。

C適切な支援の提供

- ・標準化されたアセスメントツールは使用されていない。
- ・職員間の打ち合わせは、少ない時間の中でも行えるように工夫をしている。

保護者による評価

A環境面

- ・職員配置数や専門性の適切性については、多くが適切だと考えているが、人手が足りていないと感じている方もいた。
- ・衛生面についておおむね問題なし。

B適切な支援の提供

- ・児童発達支援計画について沿った支援が行われていないとの回答はなかった。
- ・センターや行われる療育について説明が足りていない。
- ・集団だと個人に合わせた支援ができていないとの意見あり。
- ・活動プログラムについては、固定化や繰り返しが多くて子どもの学習に良い
- ・活動プログラムは繰り返しが多くて子どもが飽きている
- ・他の園との交流についてはコロナ禍なので仕方ない。

C保護者への説明等

- ・家族支援プログラムが行われている。
- ・研修会をもっと開催してほしい。
- ・保護者同士の連携が支援について懇親会などがなくなって残念。
- ・懇親会はなくても構わないという意見もあった。
- ・そのほか、保護者への支援が少ない、相談がしにくい。

D非常対応

- ・非常時の対応については「わからない」との回答が多かった。

D 関係機関や保護者との連携

- ・他機関との連携については全体的に、特に医療機関との連携をより一層深めていく必要がある。
- ・他の支援センターからの助言や研修はあまり受けていない。
- ・他の園のお子さんたちとの交流はコロナ禍もあり、行うことはなかった。

E 保護者への説明責任等

- ・保護者同士の連携の支援は少ない。
- ・地域に開かれた事業運営も今後の課題。

F 非常時等の対応

- ・虐待防止のための研修などがもっとできたら良いとの意見があった。

E 満足度

- ・多くの方が満足しているとの意見であったが、十分ではない点が見受けられた。
- ・通所を楽しみにされているお子さんがほとんどであった。

事業所内での分析

【共通点】

- ・厚生労働省が定めた職員の定員やスペース等は満たしているが、アンケートの回答の中には職員配置について足りていないという内容が見られた。制度について職員への周知が不十分であった。
- ・保護者同士の連携の支援が少なかった。
- ・他の園との交流がなかった。
- ・生活空間は清潔で心地よく過ごせる空間になっている。

【相違点】

- ・非常時の対応について訓練は行えているが、周知が不十分な部分がある。
- ・日頃のお子さんの状態については伝え合うことが出来ているためか、職員は保護者への相談に応じ、必要な助言や支援を行っていると認識しているが、保護者の中では保護者支援が不十分で相談がしづらいといった意見もあった。

分析・検討してみて…

事業所の強み

- ・お子さんが通所を楽しみにされている。
- ・清潔で心地よく過ごせる環境。
- ・日頃から子どもの状況を伝え合うことができている。
- ・子どもと保護者のニーズや課題が客観的に分析された上で児童発達支援計画が作成されている。

事業所の改善点

- ・職員の定員は満たしているものの、クラスの様子に合わせて配置人数を調整する必要がある。必要な際はヘルプを入れるなどの対応が求められる。
- ・保護者同士の連携の支援が少なかったため、懇親会など交流を持てる機会を設定する。なくて構わないとの意見もあったため、少ない頻度からの実施が望ましい。また、円滑に進める方法も検討が必要。
- ・職員だけの災害訓練や緊急時の対応について研修をした際は、保護者への報告もする必要がある。
- ・活動プログラムについての説明を支援計画と結び付けながら行うなど、より丁寧に行う必要がある。
- ・個別に相談しやすい環境を整える。

事業所の改善への取り組み

- ・職員の配置については基準を遵守した上で、クラス開始後、定期的に適切か確認を行う。お子さんの出席人数に合わせて適宜、対応する。
- ・保護者同士の連携のため、懇親会などの実施を検討する。
- ・職員の災害訓練や緊急時の対応についての研修をした際に、保護者へも周知する。
- ・活動プログラムについての説明をより丁寧に行う。
- ・相談しやすくなるように、職員から満遍なく保護者に声を掛ける。
- ・他機関との連携をとれるように関わりを考えていく。

～自己評価を行っての事業所としての感想など～

職員は保護者への声掛けを意識して行っているが、相談となるとし辛いところがあるなど、違いがあることがわかった。“職員がしているつもり”であることがないか、振り返る必要があるといえる。また、職員内でも周知できておらず「わからない」と回答が多いものがあったため、職員間での情報の周知も徹底する必要があるとわかった。

事業所名 江戸川区篠崎児童発達支援センター

担当者 山本歩美